

2021（令和3）年度  
相模原看護専門学校  
公募推薦・社会人入学試験

**国語**

（試験時間 50 分 配点 100 点）

**注意事項**

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答する途中で、ページの落丁・乱丁や印刷不鮮明の箇所および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
3. HB の黒鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムで完全に消してからマークしてください。
4. 氏名を記入し、番号欄を正しくマークしてください。
5. 試験終了の合図と同時に解答を止め、鉛筆を置いてください。
6. 解答用紙は試験官の指示に従って提出してください。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

『竹取物語』は、今日のわれわれに読みやすい物語であるとはいえない。その理解には古典語の文法や、古典語の語彙に通じる必要がある。しかし、その言葉が、ほぼ自分たちの言葉であった時代の女性にとっては、<sup>1</sup>これはまことに興味津々たる物語であつたに相違ない。何故なら、この物語は、竹の中から生まれた三寸ばかりの少女がたちまちにして成長し、五人の男性に言い寄られる。その一人一人に難題を課して、男性が虚偽の申し立てをするのを一つずつ暴露して行く。そして最後には、天皇から求婚される。——そうしたことが当時の宮廷・貴族の夢見勝ちな女性にとって、どんなに破天荒な幸福・悦楽であつたことか。しかもかぐや姫はそれを拒否して、自分は月世界のものであるといつて、秋の名月の夜に昇天してしまう。

愛されたいとか、昇天してしまいたいとかいう、女性の本能的な願望を見事に満足させるようにこの作品は書かれている。これは若い女性を指して作られた物語である。しかもそこに登場する人物には、日本の古典その他に通じた人間でなければ名づけることの出来ないような学問的な裏づけのある名がつけられている。そしてその文体には漢文訓読にだけ見えるような語句がある。このことは、これが漢文の世界になじんだしかるべき男の文章であつたことを示している。つまり『竹取物語』は、下級官人が、宮廷の若い女性の歡心を求めて造形した作品なのである。女手による『古今集』の成立は、こうした新しい世界を導き出した。

しかし、女手が本当に女手としての役割を果たしたのは、男性が女手を使って女性のための文藝を産出した場合ではなかった。女が自分自身のために、自分自身の生命をこれによって刻むことができるようになったこと、<sup>2</sup>ここに女手の眞実の意味、本当の価値がある。

まずその第一はよく知られているように、『かげろふ日記』である。

これは一人の受領の娘として生まれた女性が、時の権力者の第二夫人となつたときに当然味わつたさまざまの女の苦しみを、あらわに記した日記風の文章である。

女手で日記を書くことは、太后穩子のいわゆる『太后日記』の例がすでにあつた。それは、

太后御記云 おとどの御賀を実頼の中將つかうまつれり 四尺の御屏風よるこび御てをうへにかかせたてまつらせ給

このように実務的な記録を中心とするものだった。しかし女手で書いた『かげろふ日記』の持つ意味は、そうした実務的な日

常の記録を、女が自ら書き得たということではない。<sup>3</sup> なまの言葉、つまり自分が母親から教えられ、それによって自分の精神と能力とを養い育てて来た言葉を使って、女が女として生きる喜びと苦しみとをありありと書き込むことができたということである。『かげろふ日記』の著者の父親は、文章生出身の、受領階級の一人であった。衛府の下級官人として務めていたときに、その娘、当時、日本の三美人の一人とされていた娘、『かげろふ日記』の著者を、第二夫人としたいとする衛府の上官、藤原兼家の申込みを拒絶することはできなかった。その申込みを受け入れ、兼家が通って来るようになった二カ月後には、おそらく兼家の口ききによってであろう、娘の父親、倫寧<sup>しんやう</sup>は陸奥府の長官に任命されて赴任する。

兼家は当時の右大臣家の三男であり、後に大納言を経て、関白に至った人物である。『かげろふ日記』の著者にとって第二夫人という位置は、はじめから覚悟の位置であったとしても、最初の妊娠・出産の直後、町の小路の女への兼家の手紙を手箱の中に発見する。——ここから一人の女としての苦しみが始まる。自分の美貌と歌才とについての自信、それにもかかわらず歌合せの場に出させてもらえない<sup>4</sup>。第一夫人に子供が生まれても、そのことは<sup>a</sup> シヨウ撃として何も書かれてはいない。しかし、町の小路の女に子供が出来たときの逆上、そしてその子供の死んだときの凱歌をあげるに似た喜びの書き振り。

その文章は『枕草子』や『源氏物語』に比較すれば必ずしも上手であるとはいえない。無造作に書かれた部分も目立つ。しかし、『かげろふ日記』の、日本文学史での意味は、女が自分の苦しみ、悲しみを思うままに文章化するという道をここにつけたということである。

女が心の奥底の悲しみを文章化したという点では、『源氏物語』も同じである。

『源氏物語』の著者もまた受領階級出身の女性である。記憶力と構想力と表現力に恵まれ、稀な天才的な能力を持っている。女であるが故に、そして受領の娘として生まれたが故に、紫式部は現世的な幸福を得ることはできなかった。

学問の能力のある女が、現代でもそうであるように、紫式部ほどの学識を身につけたなら、凡<sup>b</sup> ヨウに見える男と結婚する気にはならなかっただろう。そのあげくは全くの晩婚の形で結婚する。その相手はやはり受領の一人であるが、年齢は四十の半ばに近く、すでに三人の妻と別れ、それぞれの妻に子供のある男の、第四番目の妻として紫式部は結婚した。その男との間に一人の女子を設けたが、その夫も間もなく死んだ。その後、彼女は、藤原道長の邸に出仕する。つまり今日の女中としてつとめに出た。後の記録である『尊卑分脈』の紫式部の項に「道長妾」とあるのは意味深長である。彼女の目の前には、天皇、皇后、左大

臣、右大臣、その子供たちの豪華な生活があった。しかしそれは、<sup>5</sup> 受領の娘風情には手のとどかない世界である。『源氏物語』ははじめ、その華麗な世界の主人公、光君をたたえ、予言の実現に向って展開する宮廷生活を描く。その間の、光君の輝きの陰に見える隠しごとを写して行った作者の目に、宮廷の女たちの、それぞれの悲しみがあきらかに見えるようになる。そして、女が出会う宿命を書くに至る。

この作者は、当時の男子が読んでいた『白氏文集』『史記』など極めて多くの漢籍に通じ、仏教を原典で読み、『古今集』以下の日本の古典をそらんじている女であった。そして、光といえば陰、栄えといえば衰え、喜びには悲しみという、物事の相反する面を絶えず見すえながら、微かな動きをとらえ、ほのかな味わいを失わない文体で、五十四帖にわたる物語を完成した。

作者は当時の男性以上に漢字・漢語に精通していたにかかわらず、それを正面に振りかざして表現を綺羅綺羅しくはしなかった。むしろ多少古い言葉遣いの和文体で、あらわを避け、薄衣をまとう女性の姿体を思わせる筆づかいによって事を精<sup>c</sup>に書き上げた。これは漢語に頼らずヤマトコトバだけによる表現の極致であり、女手をもってしたからこそ成就し得た文章である。そこには、いわゆる<sup>6</sup> 散文精神といわれるような強靱な精神が脈打っていた。

どんなことがあってもめげずに、忍耐強く、執念深く、みだりに悲観もせず、楽観もせず生き通して行き、すぐ得意になったりするようなことはなく、と同時に、自分の置かれている状況の薄暗さを見てすぐ悲観したり、滅入ったりすることもなく、無暗に音をあげず、じつと我慢して冷静なものを見すえる。見なければならぬものにおびえたり、<sup>d</sup> セン<sup>d</sup> 慄したり目を蔽ったりしないで、何処までも現実を見つめながら堪<sup>e</sup>え堪<sup>e</sup>えて生きて行く。このような「散文の精神」が、はやくここに具現されているのを見る。

男子は漢字の世界に生きていて、常に中国の空を望んではその<sup>7</sup> を心の何処かで行っていた。だからその目には男と女との間の本当の関係を見て表現する力は養われなかった。それに対し、女は、自分の悲しみと苦しみとを、なまの言葉で直接文字化できる女手の世界に生きていた。だからこそ、『源氏物語』のような達成があり得たのである。

『源氏物語』までは「物語」は、女房が声をあげて読み、それを貴族の子弟、女たちが集まって聴くものであった。それはあたかも韓国で<sup>(注)</sup> 諺文が創成されたとき、男子は漢字に執着してこれを顧みなかったに対し、女・子供が、この諺文による創作の音読を集まって聴いたというのと、全く<sup>8</sup> を一にする行為であった。しかし、『源氏物語』は朗読のための台本などでは決し

てない。また、何人もの人間によって書きつがれたものでもない。まがうかたなく一人の超えてすぐれた女、受領階級に生まれ  
た女によって書かれ、完結された、一貫した主題の発展のある物語である。もし、語り、朗読するための文章ならば、もっと類  
型的表現が多くあるはずである(あたかも『平家物語』のように)。『源氏物語』の宮廷の描写の中には同一の状況と思われる場  
面がいく度か、<sup>e</sup>セイ起するが、そこで全く同一の表現の繰返しを発見することはほとんどできない。作者は事態をこまかく見て  
精細に状況を書き分けている。『源氏物語』は全く、個々の読み手がその女手による表現を一字一字、一語一語読み分け、味わ  
い分けることを要求している作品である。ヤマトコトバだけの文章としては、遂にこれを超える作品は現われなかった。

(大野晋『日本語の世界』より)

(注) 諺文：朝鮮固有の文字。ハングル。

問一 傍線部 a～e のカタカナと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、マークせよ。解

答番号は 1 ～ 5。

- |   |   |
|---|---|
| <p>a</p> <p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1</span> ショウ撃</p> <p>① 風邪のショウ状が出る。</p> <p>② ショウ動買いする。</p> <p>③ ショウ細を語る。</p> <p>④ 言語のショウ壁がある。</p> <p>⑤ 安全を保ショウする。</p> | <p>b</p> <p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">2</span> 凡ヨウ</p> <p>① 病後の静ヨウをする。</p> <p>② 資金を運ヨウする。</p> <p>③ 中ヨウを保つ。</p> <p>④ 抑ヨウをつける。</p> <p>⑤ 準備が肝ヨウだ。</p> |
|---|---|

c 精矧

3

- ① 矧密な案を立てる。
- ② 矧拙な文を直す。
- ③ 旧矧の仲に再会する。
- ④ 矧安を維持する。
- ⑤ 矧位協定を結ぶ。

d

矧慄

4

- ① 矧細な模様だ。
- ② 矧鋭的な理論だ。
- ③ 終結を矧言する。
- ④ 矧練された味だ。
- ⑤ 矧争を終える。

e

矧起

5

- ① 法案が矧立する。
- ② 矧来の気質である。
- ③ 矧貧を保つ。
- ④ 矧人君子然とする。
- ⑤ 矧耕雨読の日々。

問二 傍線部1「これはまことに興味津々たる物語であったに相違ない」の理由に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ

選び、マークせよ。解答番号は **6**。

- ① 主人公と自分を重ねて読めたから。
- ② 自分たちの時代の言葉で書かれていたから。
- ③ あり得ないストーリーに魅了されたから。
- ④ ストーリーの展開が早く願望をかなえてくれたから。
- ⑤ 古典に通じる学問的な裏付けがあるから。

問三 傍線部2「ここに女手の真実の意味、本当の価値がある」の説明に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マ

ークせよ。解答番号は **7**。

- ① 女が自分の苦しみ、悲しみを思うままに文章化したこと。
- ② 女手による「古今集」が成立して、新しい世界を導き出したこと。
- ③ 最初の妊娠、出産直後から女としての苦しみが始まること。
- ④ 実務的な記録の中に、生きる喜びと苦しみをありありと書き込んだこと。
- ⑤ 娘として父親の出世のために結婚生活を受け入れること。

問四

傍線部3「なまの言葉」と反対の意味になるものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は

8。

- ① 和文体
- ② ヤマトコトバ
- ③ 古い言葉遣い
- ④ 漢語
- ⑤ 女手

問五

空欄4に入る最も適切な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は

9。

- ① 不満
- ② 未練
- ③ 後悔
- ④ 誤解
- ⑤ 羞恥

問六

傍線部5「受領の娘風情」の意味することを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は

10。

- ① 目立たない容姿
- ② 学識の無さ
- ③ 身分の低さ
- ④ 世間知らず
- ⑤ 怖いもの知らず

問七

傍線部6「散文精神」の意味に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は

11。

- ① 多少古い言葉遣いの和文体
- ② 韻律に頼らない文体
- ③ テンションを押さえた表現
- ④ 強い感情を貫き通す心
- ⑤ 現実から目をそらさない態度

問八

空欄7に入る最も適切な言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は

12。

- ① 空想
- ② 憧憬
- ③ 創作
- ④ 模倣
- ⑤ 実現

問九 空欄8に入る最も適切な語を、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 13。

- ① 軌      ② 機      ③ 期      ④ 気      ⑤ 基

問十 本文の内容に合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 14。

- ① 竹取物語は、男の書き手が若い女性読者の気を引くために書かれた作品である。  
② 女が日記を書くことは実務的な記録が中心だったが、倫寧の娘は、生きる喜びと苦しみを生の言葉で書いたところが新しい。  
③ 紫式部は記憶力、構想力、表現力に天才的な能力を持っていたが、身分が低かったので幸福な結婚生活を送れなかった。  
④ 兼家の第二夫人は、第二夫人という位置をわきまえていたが、自分より身分の低い女の出産では感情をあらわにしている。  
⑤ 源氏物語の作者は、漢籍と仏教を原典で読んでいたので、五十四帖にわたる物語の文体にもそれらの影響がみられる。



《10ページ以降にも問題があります》

問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

どの神話でも時間を生み、暦によって時間を司るのは神である。もし古い神と新しい神が争って古い神が破れば古い神の時間は新しい神の時間に取って代わられる。これが改暦である。ところが、日本では明治六年の改暦の際にはそれまで千三百年近く使われてきた月の暦があっけないほどすんなりと太陽の暦に切りかわってしまった。

『遅刻の誕生』に収められている、同志社大学大学院文学研究科研究生であった川和田晶子あきこさんの論文「明治改暦と時間の近代化」にも書いてあることだが、福沢諭吉は「太陽暦には閏月うるふづきが無い<sup>1</sup>ため、経営上の損失が少なくて済む」という論を立てて改暦を後押しした。旧暦では五年に二回の割合で一年が十三か月ある閏年うるふとしがめぐってくる。この閏年には会社の社長は従業員の給料を十三回払わなくてはならないが、太陽暦だと閏月がないので一年はいつでも十二か月、給料も十二回でいいという話である。改暦について福沢でさえそれくらいの認識だった。

明治六年、旧暦は太陽暦に切りかえられたが、それまで使われていた旧暦と太古の暦に新たに太陽暦が加わっただけのことだった。こうして、三つの水流が一つに合わさって流れるように三つの時間が流れはじめた。

日本人の生活の中を三つの時間が流れているということ空間に引き写すならば、日本のどの町や村にも神社がありお寺があり教会があるようなものではなからうか。日本人は正月には神社に初詣をし、教会で結婚式をあげ、お寺で葬式をしても何の 2 も感じなければ矛盾しているとも思わない。むしろ、この神々や諸仏の分業体制を当然のことと知っている。せいぜい時折、我ながら身勝手なものよと <sup>a</sup> タン息するくらいのことだろう。

こうしたことがいともたやすくできてしまうのは日本人がもともと八百万やおよその神々を祭る人々であったからである。仮にユダヤ教やキリスト教やイスラム教のような一神教の国であれば、神は自分以外の神を認めず、もし別の神が現われれば滅ぼそうとする。その結果、勝てば敗れた神を根絶やしにするし、逆に敗れば根絶やしにされる。

ところが、八百万の神々はこれといった摩擦もなく分業体制をとりながら、この国の野山のあちこちに <sup>b</sup> チン座している。互いに争うこともあるが、相手を根絶やしにすることなど滅多にない。それどころか、敗れた神をふたたび神として祭ることさえある。大和の神々に敗れた出雲の神々はふたたび大いなる神として崇められた。藤原時平ときひらの姦計かんけいに陥られ、大宰府に追放されて憤死した菅原道真すがわらのみちざねは朝廷によって天神として祭られた。明治政府に敗れた西郷隆盛さいごうたかもりは明治政府によって英雄としてたたえられ

た。寛容といえど寛容、いい加減といえどいい加減。

この<sup>3</sup>八百万の神々への信仰が複数の宗教を何のやましきも感じることなく受け容れるのを可能にしているのと同じように、複数の時間を受け容れる土壌ともなった。会社や学校、電車や飛行機など表向きは太陽暦で動いているものの、奥向きには旧暦や太古の暦が今なおどっしりと根を下ろしている。この入り組んだ時間の流れの中で暮らして何の不都合もないどころか、不思議とさえ思わないのが不思議でならないなどというとかえって不思議がられる。

しかも、太陽の時間と二つの月の時間を日本人はさながら電車を乗りかえるように自在に乗りかえながら生活しているのではなからうか。複数の時間が共存するということは、そのときどきにどの時間に沿って行動するか、<sup>4</sup>その選択権が人間の手に与えられているということでもある。日本は時間の選択制をとっている社会なのである。だからこそ、正月は太陽暦で祝っても、お盆は月遅れで営む。昼は太陽暦に従って会社で働いたあと、夜は太古の暦にまぎれこんで仲秋の名月を眺めることができる。

新しいものが生まれても古いものが消え去ることなく残る。注意して眺めなおすと、神仏や時間ばかりではなくこうしたものが日本という国にはいくらかもある。すぐ思い浮かぶのは短歌である。短歌の前身である和歌は<sup>5</sup>の初めに俳譜の発句、のちの俳句の出現によって乗り越えられてしまった。しかし、消滅することなく今なお盛んに詠まれている。こうして、日本の詩歌は型式を増やし、いいかえると詩歌を詠もうとする人にとつての選択肢を増やしてきた。

仮名遣いもその一つである。日本語の仮名遣いは昭和二十一年（一九四六年）、内閣告示によつて新仮名遣いに改められた。だからといって、旧仮名遣いがなくなつてしまつたわけではない。半世紀後に書かれた丸谷才一<sup>まるやさいいち</sup>の『輝く日の宮』は大半が旧仮名遣いであるが、多くの人々が何の<sup>c</sup>テイ<sup>c</sup>抗感もなくすらすらと読める。

短歌は今では新仮名で書く歌人が多いのではないかと思うが、俳句は旧仮名で書く俳人の方が多い。私自身は文章は新仮名、俳句は旧仮名と使い分けているが、ときどき、なぜ俳句はいまだに旧仮名遣いなのかと尋ねられることがある。質問者の気持ち<sup>d</sup>を推<sup>d</sup>ソクすれば、なぜ滅びてしまつた旧仮名で書くのか、なぜわざと古めかしくするのかということだろう。

しかし、旧仮名は滅んだのでもなければ、俳句は滅びた仮名遣いで書かれているのでもない。敗戦後の新仮名遣いの採用は仮名遣いの選択肢、それもあまり芳しくない選択肢を一つ加えただけのことなのである。旧仮名は新仮名とともに今もなおお生きている。旧仮名がもし死んでいるように見えるとすれば、ただ眠っているだけなのである。眠っているからときどき目を覚ます。

こうしたところにも八百万の神々を祭ってきた<sup>6</sup> 日本人の精神構造が作用しているのではなからうか。

日本人は季節感の豊かな国民であるとしばしばいわれてきたが、昔はいざ知らず、昨今の日本人の暮らしぶりをみれば空々しいお世<sup>e</sup>ジというほかはない。当の日本人自身も自分たちは季節に敏感な国民であると今なお思いこんでいる節があるが、失われてしまったものにまだ気がついていないだけのことである。

日本人の季節感が次第に平板になってきたのは、科学技術の進歩によって冷暖房が普及し、野菜が一年中食べられるようになったからであるなどよくいわれるが、一つには明治六年の改暦が大いに影響していると思う。明治改暦は日本人の季節感を根底から揺さぶる大事件だった。それなのに日本人が平然としていられたのはその重大さに気づかなかったからであり、気づいていながらも季節感などどうなるうが、日本の近代化という国家の一大事に比べれば些細な代償と想っていたからである。

明治改暦による最大の変化は新暦の月のめぐりは旧暦よりひと月早まるために、江戸時代まで千年以上にわたって続いていた月ごとの季節感と年中行事が混乱してしまったことである。

旧暦時代、春は一月から三月、夏は四月から六月、秋は七月から九月、冬は十月から十二月という具合に一年十二か月が四季によってきれいに四等分されていた。細かくみれば、立春の前後に一月一日がめぐってくるよう暦が調整されていた。同じように立夏前後に四月に入り、立秋前後に七月が始まり、立冬前後には十月が来るようになっていた。この十二か月のめぐりに沿って二十四節気と年中行事が水が流れるように整然と並び、こうした時間の地図の上で日本人の季節感が育まれた。

今、一年の要である暮れから正月にかけての流れを眺めてみると、旧暦では十一月( 7 )の冬至を過ぎるとやがて十二月( 8 )が始まり、寒に入る。寒の内が旧暦の暮れである。そして、大晦日<sup>おおみそか</sup>、明けて元旦、その前後に節分、寒明け、立春が順にめぐってくる。さらに、七種<sup>ななくさ</sup>、小正月と続く。正月は文字通り初春<sup>はつはる</sup>であった。

ところが、明治改暦以降は十二月も押し詰まって冬至とクリスマスがあり、すぐに大晦日、元旦。その後、寒に入るので立春は新年から一か月もあとの二月初めにめぐってくることになる。正月を初春とはいってもこれから寒を迎えるのであるから正月の季節感などあったものではない。

(長谷川權『俳句的生活』より)

問一 傍線部 a～e のカタカナと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選び、マークせよ。解

答番号は 15 ～ 19。

a タン息

15

- ① タン独で登山する。  
 ② 君子はタン交する。  
 ③ 休職をタン願する。  
 ④ 真実をタン求する。  
 ⑤ 解決のタン緒となる。

b チン座

16

- ① チン守の森に参る。  
 ② 前代未聞のチン事だ。  
 ③ 都庁にチン情する。  
 ④ 冷静チン着に対応する。  
 ⑤ チン貸を契約する。

c テイ抗

17

- ① 規約にテイ触する。  
 ② 対戦相手をテイ察する。  
 ③ 山村にテイ住する。  
 ④ プランをテイ案する。  
 ⑤ 業務がテイ滞する。

d 推ソク

18

- ① 規ソクを守る。  
 ② 中止をソク断する。  
 ③ 販売をソク進する。  
 ④ 幅をソク定する。  
 ⑤ 拙ソクをいさめる。

e 世ジ

19

- ① 仕事をジ職する。  
 ② ジ悲深いふるまいだ。  
 ③ 新規ジ業を起こす。  
 ④ 行き過ぎにジ重する。  
 ⑤ ジ候の挨拶をする。

問二 傍線部1「日本では明治六年の改暦の際にはそれまで千三百年近く使われてきた月の暦があっけないほどすんなりと太陽の暦に切りかわってしまった」について、筆者はどのように考えているか。次の①～⑤のうちから適切なものを一つ選び、マークせよ。解答番号は 20。

- ① 福沢は経営的な視点のみで改暦を捉えているが、改暦によって三つの時間が流れはじめたことに気づいていなかった。
- ② 福沢は給料の支払いのみを問題にしているが、改暦がもたらす八百万の神々の分業体制について顧慮していなかった。
- ③ 福沢は太陽暦は経営者に有利であると考えたが、改暦は日本人の季節感を根底から揺さぶる大事件であった。
- ④ 福沢は暦の近代化が日本の近代化につながると考えたが、改暦は日本人に時は金なりという時間意識を芽生えさせた。
- ⑤ 福沢は会社の社長の立場を中心に考えたが、改暦が年中行事に混乱をもたらして働き方の変化を招いた。

問三 空欄2に入る語を、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 21。

- ① 不都合
- ② やましき
- ③ 罪悪感
- ④ てらい
- ⑤ うしろめたさ

問四 傍線部3「八百万の神々」と反対の意味になる言葉を、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 22。

- ① 一神教
- ② 古い神
- ③ 新しい神
- ④ 神話
- ⑤ 近代化

問五 傍線部4「その選択権が人間の手に与えられているということでもある」を漢字二字の熟語で言い換えると、どのような言葉になるか。次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 23。

- ① 矛盾
- ② 寛容
- ③ 認識
- ④ 人権
- ⑤ 自在

問六 空欄5に入る語を、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 24。

- ① 古代
- ② 中古
- ③ 中世
- ④ 近世
- ⑤ 近代

問七 傍線部6「日本人の精神構造」を具体的に説明するとき、本文の内容に合致しないものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 25。

- ① 短歌の前身である和歌が、俳諧の発句の出現によって乗り越えられた後も、短歌は今なお盛んに詠まれている。
- ② 昭和二十一年、内閣告示によって新仮名遣いに改められた後も、旧仮名遣いを使う人が存在している。
- ③ 日本人は、季節感が豊かな国民であると言われてきたのに、新暦が採用されてから時間に厳格になった。
- ④ 正月に神社に初詣をして、教会で結婚式を挙げ、お寺で葬式をする。
- ⑤ 明治六年以降、旧暦と太古の暦は奥向きに根を下ろしながら、新暦で社会生活を送っている。

問八 空欄7・8に入る語を、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つ選び、マークせよ。解答番号は、7 26、8 27。

- ① 神無月
- ② 如月
- ③ 霜月
- ④ 師走
- ⑤ 長月

問九 本文の内容に合致するものを、次の①～⑤のうちから一つ選び、マークせよ。解答番号は 28。

- ① 日本人の季節感は、千年以上にわたって続いてきた二十四節気と年中行事が整然と並んでいたことよって育まれてきた。
- ② 日本人の季節感が平板になってきたのは、科学技術の進歩によって冷暖房が普及し、野菜が一年中食べられるようになったからである。
- ③ 十二月も押し詰まってクリスマス、大晦日、元旦、正月と行事が続くのも、八百万の神々への信仰と無関係ではない。
- ④ 日本人の生活に流れている三つの時間と、神々や諸仏の分業体制は根本的に繋がっていて、他の文化圏とは異なっている。
- ⑤ 日本人の生活の中にも流れる三つの時間は、そのまま空間に引き写して考えることで、精神構造を説明できる。

《以下余白》

